



全日本社会貢献団体機構 会長 **杉浦正健**さん

聞き手:村松真貴子さん

子どもたちがいきいきと生きられる
社会づくりや東日本大震災からの
復興を支える活動を継続する

弁護士から政界入りし、小泉内閣で法務大臣を務められた杉浦正健さんが、堀田力さんの後任として、全日本社会貢献団体機構の新会長に就任した。

政界引退後は、自ら財団法人を立ち上げ、経済的苦境にある高校生たちに奨学金を給付したり、アジアの子どもや農民を支援するなど、社会貢献活動に積極的に取り組まれている杉浦さん。新会長就任にあたっての感想や今後の抱負について、AJOSCの社会貢献フォーラム（福井県、青森県、長崎県、奈良県）で司会を担当した村松真貴子さんが、お話をうかがった。

AJOSC顧問・野沢太三さんの
推薦を受けて会長に就任

村松 全日本社会貢献団体機構（以下、AJOSC）の第4代会長ご就任、おめでとうございます。

杉浦 ありがとうございます。大変、光栄なことだと思っております。私の2代前の法務大臣を務められ、現在、AJOSCの顧問をしていらっしゃる野沢太三先生から最初にお話をいただいたのですが、そのときは、「野沢さん、あなた自身がやるべきだ」と申し上げました。というのも、犯罪や非行をした人の更生を無給でお手伝いする保護司の団体である全国保護司連盟の理事長という、まさに社会貢献のかがみのような立場にいらっしゃるわけですから、野沢先生以上の適任者はないと思ったのです。ですが、その仕事が多忙だということでご辞退されましたので、私のほうで引き受けさせていただくことになりました。

村松 杉浦会長は、第3次小泉純一郎改造内閣で法務大臣としてご活躍なさいました。そのときは、死刑制度などに関して、ご自身のポリシーを貫かれたという印象があります。

杉浦 生来、ぶきつちよな性格でして、器用に世間を泳

ぎ回れるような性質ではありません。ただ、いったんこうと決めたことは、それをやり続ける性分です。

村松 それが、若々しさにもつながっているのかもしれないね。何か健康のために続けられていることなどは、おありですか。

杉浦 毎日、1万歩は歩くように心がけています。65歳まではジョギングをしていたのですが、今はウォーキングです。食事でも野菜や魚を中心にして、脂っこいものはなるべく食べないようにしています。あとは毎日、野菜ジュースを飲むこと、サプリメントを摂ること、定期的に人間ドックで診てもらふことと、たまに好きなゴルフをする程度です。

「杉浦ブラムチャリヤ」で
高校生に奨学金を支給

村松 杉浦会長は、ご自身でも「杉浦ブラムチャリヤ」という財団法人を設立され、社会貢献に取り組んでいらっしゃるお聞きしていますが、それはどのような団体で、どういった活動をされているのでしょうか。

杉浦 法人名となっているブラムチャリヤとは、インドのヒンドゥー教社会において最上位階級とされているバラモンの人たちが考える、生涯の4段階のうちのひとつ



です。この4段階は四住期と呼ばれていますが、そのうちの学生期を指す言葉です。この時期は、師について学ぶ期間とされています。その次が家庭を設けて生活を充実させるべき家住期、さらに、林間に隠棲して悟りを得るために修行する林住期、最後は一定の住所を持たずに遊行する遊行期となっています。あえて例えれば、私の人生も大学を卒業するまでが学生期、会社員や弁護士として働いていたときが家住期、政界にいた時期が林住期、それを引退して再びこうして弁護士をやっている今が遊行期ということになるでしょうか。

村松 プラムチャリヤとは、つまり人生における若い時期にあたるわけですね。

杉浦 そういふことになります。杉浦プラムチャリヤでは、かつての私の選挙区であった愛知県岡崎市、西尾市、額田郡幸田町、幡豆郡3町(注:現在は西尾市に編入)にある17校の高校に通う生徒のうち、さまざまな事情で経済的に苦しい立場に置かれている生徒を各校1名ずつ、校長から推薦していただき、毎月1万円の奨学金を返済義務のない給費制で提供しています。その奨学金を受ける条件はたったひとつで、高校を卒業するときに今後の人生に対する決意表明を書いてもらうことだけです。

村松 今、子どもたちの貧困化が問題になっています。経済的な理由で、高校を中退せざるを得ない子どもたち、あるいは学校を卒業後に奨学金返済に苦労している若者たちがいるというニュースをよく聞くだけに、それはすばらしいことですね。どんな決意表明が寄せられるのですか。

杉浦 「おかげさまで大学に進学することができました。これから一生懸命、勉強したいと思います」とか、「将来、看護師として働きたいという夢をかなえるために、看護学校に入学できました。ありがとうございます」といったものが多いですね。

村松 そもそも、どういった経緯や目的で、その財団を設立されたのですか。

杉浦 2009年に政界を引退する直前に、故郷の岡崎



市にあった先祖代々の田畑を4,000万円で売却することになりました。私の家は先祖代々、農家でして、おそらく爪に火を灯すように身を粉にして働き、少しずつ土地を増やしてきたはずで、本来、ご先祖様のものですから、それを売却したお金を私が自分勝手に使うことはできないと思いました。何とか社会に役立てることができないかといういろいろ考え、そのお金を原資として財団法人を設立し、その運用利益を奨学金に充てることにしたのです。幸いなことに、その活動に賛同して寄付をしてくださる方々もいらっやして、2011年から奨学金の支給をスタートすることができました。

また、東日本大震災で両親を亡くしたり、いまだに仮設住宅での暮らしを余儀なくされたりしている高校生たちのために、全国青少年教化協議会という仏教関係の団体が設立した「あおぞら奨学基金」の活動に賛同し、石巻市の高校生10名に奨学金給付の支援を行っています。3年前に石巻市などを訪れましたが、大震災の被害の規模の大きさには心が痛みました。

アジアの人々の暮らしや学ぶ意欲をサポートするのも日本の責務

村松 全国青少年教化協議会という団体とは、どのようなご関係があるのですか？

杉浦 私はご縁をいただきまして、その団体の監事を務めております。この団体は日本にある仏教教団の60以上が集まって設立された公益財団法人で、仏教精神に基づいて、国内外で子どもたちの健やかな育成のお手伝いをしたり、家庭支援などを行っています。その関係もありまして、杉浦プラムチャリヤでは、スリランカで仏教を基盤に据えて農村開発運動をしているNGOのサルボダヤ会が運営する児童養護施設への寄付を続けています。ここは、それまでスイスにある財団が支援していたのですが、リーマンショックのあおりを受けて撤退してしまい、困っていたところでした。また、フィリピンの中でも最貧エリアと言われているルソン島北部のカガヤン州に暮らしている50数家族が、農業協同組合を設立してサツマイモを栽培し、その売り上

げで自分たちの暮らしを良くしたり、地域の整備をしたという話を聞き、組合設立のための資金を寄付しました。その50数家族のまとめ役のような方が日本に出稼ぎに来て、大使館でドライバーをしていたのですが、法務大臣時代に知り合う機会がありました。その縁で、寄付することになったのです。その組合から、収益が上がったのでどうしましょうかと相談を受けたので、高校に進学する子どもたちの奨学金に使うように提案しました。

村松 国内にとどまらず、アジアでもすばらしい活動をなさっていますね。

杉浦 アジアには、まだまだ産業や教育といった面で遅れている国々があります。そうした国々や人々を支援していくことも、日本の責務のひとつだと思います。何といてもアジアでは、経済的にも、工業技術の面でも、日本が先頭を切って走っている国のひとつであることは間違いありませんから。また、これもアジアに関係した活動のひとつですが、以前、私の母親が亡くなったときに、各方面から少なからぬご香典をいただきました。それを有効に活用できないかと考え、アジア学生文化協会という公益財団法人に寄付しました。この団体はアジア各国の青年学生と日本の青年学生の交流を図る目的で、学生宿舎の運営や各種の文化交流活動を行っています。そこが日本語学校を設立するための資金の募金活動を行っていることを聞きまして、母の名前で寄付することにしたのです。その学校の教室のひとつには、「杉浦ゆき記念教室」のプレートが掲げられています。

子どもたちの健やかな成長や震災からの復興のために活動する

村松 さて、これからAJOSCの会長としての重責を担われていくことと思いますが、遊技業界で構成される社会貢献のための団体として、今後どのような取り組みを行っていく決意でしょうか。

杉浦 実はお恥ずかしい限りですが、パチンコ業界の皆様がこのような組織を作り、社会貢献活動に真摯に



取り組んでいるNPOや団体に対して助成を行ったり、お仲間が行う地域貢献やボランティア活動を表彰したりしていることを知ませんでした。先日、機構の理事長である阿部恭久さんとお話しましたが、創設以来の10年間で実に素晴らしい活動を行っていると思います。まずは、これまでの活動を継続していくことが大事だと思っています。

村松 AJOSCでは助成事業の柱のひとつとして、「子どもの健やかな成長を願う事業」を推進する団体を助成対象にしています。今、日本の子どもたちは人と関わる力が衰えているのではないかと、それが人を思いやる心の欠如につながっているのではないかと危惧しているのですが。

杉浦 そういった側面もあると思います。しかし、ある意味、子どもは時代を映す鏡でもあります。もし、子どもたちに人とつながる力や思いやりが欠如しているとしたら、それは今の時代そのものが、そうした傾向にあることの反映なのかもしれません。私が子どものころは、小学生になると田んぼの手伝いなどの重労働をさせられていました。今は、そうしたことをしなくてもいい時代です。それだけ、いい時代だとも言えます。私は楽天主人かもしれませんが、子どもには素晴らしい未来があると信じています。その子どもたちに古い時代の価値観を押し付けるのではなく、未来に向けて今をいきいきと生

きるができる環境や、さまざまなことにチャレンジできる環境を整えていくことが、子供たちの健やかな成長にとって何よりも大切なことではないかと思っています。

村松 大人として、子どもたちをどのようにサポートしていくかが、社会的に今後の大きな課題だということですね。いずれにしろ子どもたちに対してさらなるチャンスを与えるということは、素晴らしいことですね。

杉浦 その通りだと思います。

村松 AJOSCのもうひとつの助成事業の柱が、「東日本大震災の被災者を元気づける事業」に対する助成ですが、これについてはどのようなお考えをお持ちですか。

杉浦 これは、国を挙げて取り組まなくては行けない課題でもあります。大震災の被害に加え、福島原発事故によって、ふるさとを離れざるを得ない方々や、自宅に帰ることが困難な方々が大勢います。その悲惨さは、言葉では到底、言い表せないものがあります。しかし、思い起こせば、第二次世界大戦の敗戦によって日本は焦土となりました。日本の中小以上の都市の多くは、アメリカ軍の空襲によって瓦礫の山となり、多くの人が亡くなりました。そうした状況から戦後、この国は立ち上がり、世界に類を見ないような復興を遂げました。今回の大震災でも、私たちは手に手を携えて、再び復興に向けて歩まなければなりません。そのためには、何



よりも被災地域のコミュニティの再興に力を注ぐ必要があります。そのときに、NGOやNPO、あるいは任意団体や民間企業が担う役割は大きい。その一翼として、このAJOSCも尽力していきたいと考えています。

村松 最後になりますが、AJOSCの新会長として、新機軸のようなものは考えていらっしゃいますか。

杉浦 これも先日の理事長との話の中で出たことですが、国連難民高等弁務官を務められ、現在は国際協力機構の特別顧問をされている緒方貞子さんのような方が将来的に出てくるために、留学などの支援が重要だと考えています。これからの世界のことを考えると、ますますグローバル化が進み、国境の壁が低くなることが予想されます。そのときに、国際社会で活躍できるエリートを育てていくことも大事だと思います。今後、日本の国際社会での地位は高まることはあっても低くなることはない。そのためにも、第2、第3の緒方さんのような方を育てることは大切です。これからは女性の時代とも言われていますから、世界で活躍できる女性を支援

していきたいですね。そうしたことのお手伝いができれば最高だと思っています。

村松 お話をうかがっていると、高校生への奨学金の給付にしろ、アジアの人々への寄付にしろ、杉浦さんは人を育てるということを大切にしているように見えますが、そこはいかがでしょうか。

杉浦 人を育てるということを意識し始めたのは、一度、衆議院議員を落選したときでした。その期間中、大学生や政治家を目指す若者を対象とする政治塾的なことを始め、外交、防衛、農政などについて、一緒に勉強しました。そこから政治家になった人もいます。「人を遣すを最上とす」という名言もありますが、やはり若い世代が育たないことには、この国の将来はないと思っています。

村松 本日はインタビューのお時間をいただき、ありがとうございました。ますますのご活躍を期待しております。

杉浦 こちらこそ、ありがとうございました。遊技業界の社会貢献活動に、これからも一生懸命、取り組みたいと考えています。



杉浦正健(すぎうらせいけん)さん

1934年7月26日、愛知県岡崎市生まれ。1957年東京大学経済学部卒業。川崎製鉄勤務を経て、1972年弁護士登録、1982年東京第一弁護士会副会長。1986年衆議院議員初当選。1990年農林水産政務次官、1992年国土政務次官、1998年衆議院法務委員長、2001年外務副大臣、2004年内閣官房副長官を歴任後、2005年第3次小泉改造内閣で法務大臣就任。2009年政界引退。現在、浅沼・杉浦法律事務所主宰、一般財団法人杉浦プラムチャリヤ代表理事、全国青少年教化協議会監事。趣味はゴルフ・散歩・囲碁、著書に「あの戦争は何だったのか 歴史の教訓として子や孫に伝えたいこと」(2014年、文藝春秋社)などがある。

村松真貴子(むらまつまきこ)さん

東京都出身。武蔵大学人文学部日本文学学科卒業。SBS静岡放送にて「テレビタリ」のキャスターを務める。その後、NHKの番組を担当する。主な番組に、「イブニングネットワーク」、「こんにちはいっと6けん」、「きょうの料理」など。現在は、「NHK学園」「NHK文化センター」講師、また全国で講演をする傍ら子どもたちへ読み聞かせもしている。全国公民館連合会理事。2012年「社会教育功労者表彰」受賞。近著に「楽しく話す生き方教室 言葉の力で未来は変わる」(2016年、全国共同出版)